

親子間会話における防災・減災に関する話題の頻度と内容

熊本大学工学部社会環境工学科 学生会員○新貝 優太
熊本大学大学院先端科学研究部 正会員 竹内裕希子

1. はじめに

近年大規模な自然災害が増加傾向にある中、防災や減災に関心が高まっている。防災・減災は自助・共助・公助の3助が事前から協働して行われることが基本である。

人口減少により過疎化・高齢化が進む地域では、自主防災組織や消防団も減少傾向にあるなか、災害を「他人事」ではなく「自分事」として捉え、一人一人が減災意識を高め、具体的な行動を起こすことが重要である¹⁾。日頃から地域住民、事業者、災害ボランティア等の連携による取組を強化し、自助・共助を中心とした地域の防災力の向上が求められる。

「発達の段階に応じた防災教育（文部科学省2013）」では、中学校段階における防災教育の目標を「日常の備えや的確な判断のもと主体的に行動するとともに、地域の防災活動や災害時の助け合いの大切さを理解し、進んで活用できる生徒」としており、共助の一員として地域に貢献することが求められている²⁾。

東日本大震災で津波によって大きな被害を受けた岩手県釜石市では、小中学生が防災教育の成果として自主的に避難を行い、99.8%の児童・生徒が生存した。これは「釜石の奇跡」と呼ばれ、学校防災教育の成果として世界から注目を集め、学校防災教育が重要であることが示された。

豊沢ら(2010)³⁾は、小学校での防災教育によって地震に対する恐怖感情が高まった児童ほど、学んだ内容を保護者へ伝達する意図が高まり、伝達されると保護者の防災行動が促されることを報告している。また、陳(2013)⁴⁾は保護者から見て危険や安全に対する意識の変化が見られた児童ほど、地震対策の重要性について保護者への伝達行動を引き起こす傾向があり、児童による伝達は保護者の家庭防災行動意図を促すことを報告している。どちらも学校防災教育により防災意識が高まるほど児童から保護者への伝達が促進され、保護者の防災行動・防災行動意図を促進することが報告されているが、具体的な防災行動については明らかにされていない。

本研究では、中学生が家庭で行っている会話の内容を分析することで、家庭へと伝達されやすい防災教育を提案することを目的とする。家庭内における日常的な会話の内容について中学生・保護者それぞれの立場から明らかにし、日常会話の中に取り上げられやすい防災教育の提案を目指す。

2. 研究手法

熊本県に位置する南阿蘇村立南阿蘇中学校及び南小国町

立南小国中学校の全校生徒並びに保護者を対象にアンケート調査を行い、その結果を分析した。南阿蘇中学校では熊本地震以降、独自の避難所運営ゲーム(HUG)を構築し実際に体育館を利用して実施する防災教育を毎年行っており、2020年度は8日間13回分の授業を行った。南小国中学校では2020年12月にHUG演習⁵⁾を開催した。アンケート調査は防災教育の前後で行い、災害に対する意識や実際に行っている対策内容、日常的な会話内容、情報伝達手段について質問した。

3. 防災教育に関するアンケート調査

(1) アンケート調査対象

アンケート調査対象は南阿蘇中学校の生徒222名と保護者199名、南小国中学校の生徒79名と保護者79名とした。事前アンケートについては両校とも12月時点で回収済みであり、有効回答率は以下の通りとなった。事後アンケートは1月に回収予定である。

表-1 事前アンケート回答状況

	南阿蘇中学校	南小国中学校
生徒配布数	222	79
生徒回答数	213	73
有効回答率(%)	95.9	92.4
保護者配布数	199	79
保護者回答数	165	73
有効回答率(%)	82.9	92.4

(2) 事前アンケート項目

事前アンケートの項目は「属性(7問)」「被災経験の有無(3問)」「災害への関心(11問)」「実際に行っている災害対策(2問)」「家族・地域の人との会話内容(7問)」「学校・地域の情報の受け取り手段(2問)」で構成した。

(3) 家庭・地域での日常的な会話内容に関する分析

図-1と2は南阿蘇中学校の保護者の回答による、家庭及び地域での日常的な会話内容の状況である。

家族全体での会話、子供との会話では「学校行事」「友人との交流」「部活動」について話す保護者が半数を超えた。地域の人との会話では半数を超えた選択肢はなかったが「最近のニュース」と答えた人が最も多かった。また「話さない」と答えた人が全体の4番目に多い結果となり、日常的にコミュニケーションが少ないことが明らかになった。「その他」の項目では「天気・天候」についてや「子どもについて」といった回答がみられた。

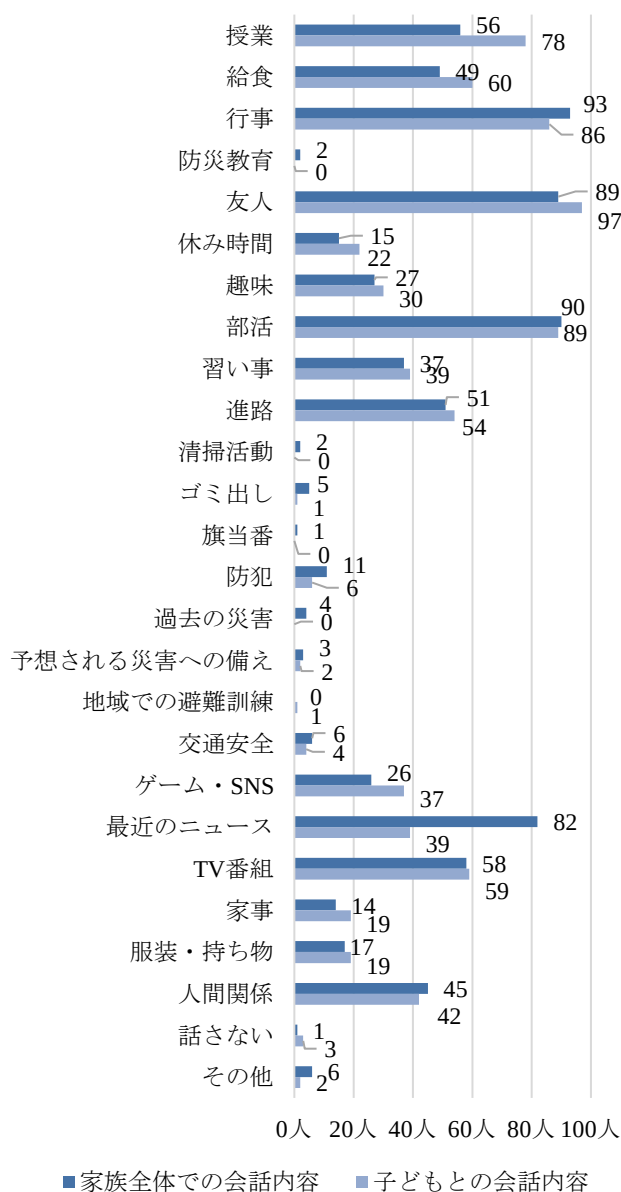


図 - 1 家族全体・子どもとの会話内容 (N=165)

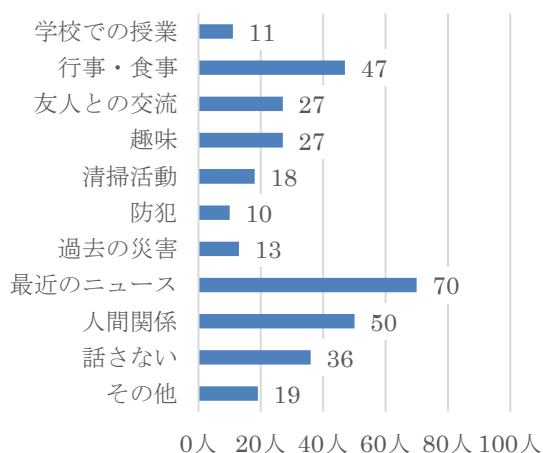


図 - 2 地域の人との会話内容 (N=165)

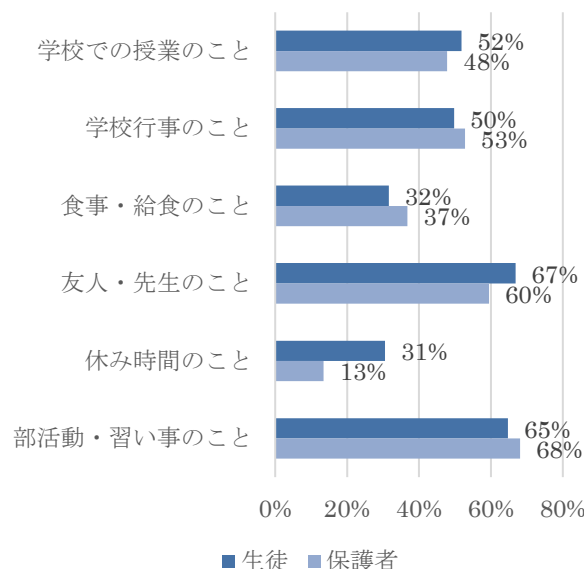


図 - 3 家庭での会話について、生徒と保護者の回答の比較

(4) 親子間における会話内容の回答の違い

図 - 3は家庭での会話の内容について、生徒と保護者の回答を比較したものである。南阿蘇中学校の回答者では「休み時間のこと」についての回答が最も少なく、また生徒と保護者の回答率の差が最も大きかった。また、「友人・先生のこと」が続いて差が大きい結果となった。他の選択肢については生徒と保護者の回答率の差が5%以内という結果となった。最も話題にされやすいのは「部活動・習い事のこと」となり、生徒と保護者の間で回答率の差も小さい結果となった。

4. まとめ

本研究では、中学生からの家庭における会話の内容を分析することで家庭・地域へと伝搬されやすい防災教育を提案することを目的とする。今後、アンケート調査の結果から防災教育が実際の対策、災害に関する意識に与える影響を明らかにし、その効果を確認するとともに伝達されやすい話題と結び付けた防災教育を提案する予定である。

参考文献

- 1) 内閣府 平成30年版 防災白書
http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h30/honbun/1b_1s_01_01.html
- 2) 文部科学省 学校防災のための参考資料
「生きる力」を育む防災教育の展開
<https://anzenkyouiku.mext.go.jp/mextshiryu/data/saigai03.pdf>
- 3) 小学生に対する防災教育が保護者の防災行動に及ぼす影響
- 4) 小学校を中核とする防災教育の効果とその波及に関する研究
- 5) 静岡県 避難所運営ゲームHUG
<http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/manabu/hinanjyo-hug/about>